

十段物語



第6回

剛毅木訥な「指南役」 佐村嘉一郎

本橋 端奈子

軍人を志す



佐村嘉一郎十段

佐村嘉一郎かいちろうは明治13（1880）年11月13日、熊本県託麻郡大江村たまに生まれた。父は、竹内三統流柔術の免許皆伝であり、「仁王の佐村」と九州一円で恐れられていた佐村正明である。父・正明は子を生まれてすぐに二人亡くしており、今度こそは、顔などはどうでも良いからとにかく体の丈夫な子が生まれるように、と不動尊に祈願し続け、生まれたのが嘉一郎であった。ただ、何とか生きながらえることはできたものの、や

はり虚弱体質の子どもで、よく薬を飲まされていたという。いつも友人に虐められては泣いて家に帰り、泣いたことで家では夕飯がもらえず、佐村は幼いながらに丈夫になりたいと強く思っていた。しかし父は、体の弱い佐村を可哀想に思ったのか、徹底的に自らの柔術で鍛え上げるようなことはしなかったようである。佐村自身も、柔術が身近にある環境で育ったことは間違いなく、ある程度父に教えを受けたと思われるが、決してそれに真剣に打ち込んだ訳では無かった。代わりに5歳から小堀流踏水術を習っており、水術のお蔭で少しづつ丈夫になっていったようである。

明治20（1887）年、父の佐村正明は、乞われて警視庁柔術世話掛となり、東京へ上ることとなった。佐村が7歳の頃のことである。この前後、佐村正明が講道館四天王の一

人・横山作次郎と試合をした、という記事が残っている。

横山さんが右腕の逆をとられ、普通なら参るところを、横山さん参りの合図をしない。腕はミリミリの音がしてきたが参らない。とうとう折れてしまったがそれでも終に参らなかつた。

とあり、この横山に佐村正明は感服し、「嘉納さんには恐るべき門弟がある。この分だと近き将来、日本は嘉納さんの柔道が今までの柔術に代わって天下をとるようになるに相違ない」と感じたという。そして、まだ幼い息子の佐村に「もし柔をやるなら柔術ではなく嘉納講道館柔道を習うように」と言い聞かせていた。そのような話を何度も聞かされた佐村は、だんだんと自分の将来について様々に思いを巡らせるようになっていた。何をなすべきか、何をもって一身の独立を図るか、明治初期に

生まれた少年の前途は、総じて大きな希望に満ちていたように感じられる。佐村の家は、武芸家という家柄もあってか、親類からは軍人が多く出ており、父の従弟である巡洋艦艦長の國友次郎は、早くから佐村に強く海軍入りを勧めていた。佐村は、一度は東京へ遊学したいという気持ちもあつたため、叔父の誘いに乗って海軍を目指すことを決心するのであつた。

明治20年代の終わり、佐村は海軍軍人になる決意を持ち、父を頼って上京し、攻玉社海軍予備科へ通うこととなる。ここで軍人になるべく学問に励もうと意気込んでいたのだが、その余暇、水術の練習にと隅田川の泥水に潜っていたところ、どうやら目に黴菌が入ってしまったらしい。この黴菌が原因で佐村の視力は著しく低下してしまったのであつた。結局、攻玉社の体格検査にはねられ、

佐村は軍人になる夢を諦めざるを得なかつた。そこで、明治法律学校に通いながら、将来を考え直すことにした。父と同じ武芸の道へ進むうか、その考えが頭に浮かんだ時に思い出されたのが、かつて父から言われた言葉である。「講道館流というのは新式の柔道で、将来においてはこれが天下に雄飛するようになる」幼い頃から聞かされ続けたこの言葉に従つて、佐村は講道館への入門を果すのであつた。時に明治31（1898）年7月14日、佐村18歳のことである。

講道館三羽烏 さんぼらす

佐村が講道館に入門したときは、ちょうど一カ月に亘る暑中稽古のさなかであつた。佐村は、小松川村の知人宅に強引に食客として住み込み、握り飯を携えて毎日講道館へと通つた。この時分、講道館で日の出の勢いをもって活躍していたのは、永岡

秀一^{ひでいち}四段と飯塚国三^{くにお}三段であった。そこで佐村は、特に飯塚を目標と定めて柔道にのめり込んでいった。敵愾心を燃やし、全力で飯塚に喰らいついて稽古を願った。¹¹熊本の、肥後もっこすの氣質を持ち、「佐村は悍馬のような奴だ¹²」とよく評されていた佐村は、一度決めたら頑固・頑迷にもそれを曲げない精神力を持っていたのであろう。また、稽古相手がどんなに強くても、どんなに弱くても、それを嫌わずに苦手な相手を作らず、誰ともやりあうことを信条に稽古を積んでいった。そうして、早くも無段甲組に編入された佐村は、迎えた10月30日の秋季紅白勝負においてその実力を認められ、入門3ヵ月目にして異例の初段を許されることとなる。¹³

佐村は早くも頭角を現しつつあった。嘉納師範は、佐村の父と相知であったこともあり、佐村には特に目を掛けていたようである。時折呼び止められては稽古をつけてもらったという。佐村は、その際の様子を以下のように回想している。

後ろで「一つやってやろうか」と声があるのでふりむくと（嘉納）先生だった。礼をして御願いしたが、技の早いこと右かと思えば左かと思えば右で御得意の浮腰で投げられ、先生はやっぱり強いと思っただね。二段の時、やはり暑中稽古で「二段になったなあ、強くなったか」と稽古して頂いたが、左自然体で引き出されると右に変わる、間髪を入れず：（笑声）¹⁵

講道館柔道を創始して既に15年、師範は40歳近くになっていたが、しかし理論ばかりでなく実践も未だ素晴らしい敵わないものだ― 佐村は、

永岡ら先輩とそう語り合い、師範への尊敬の念を深めていったのであった。

翌明治32（1899）年10月3日、1年を待たず二段へと昇段した佐村は、秋季紅白試合に副将として出場し、大野秋太郎、井上縫太郎や合田専治らの強豪を次々と投げ飛ばす快挙を演じた。同じく敵方の副将として登場した前田栄世^{さよ}に釣込腰で敗れはしたものの、まさに日の出の勢いで力をつけている筆頭と言って良かった。そしてこの頃より、「講道館四天王」「磯貝・永岡時代」に続く新たな時代の到来として、誰となく佐村嘉一郎・前田栄世・轟祥太の三人を称して「講道館三羽鳥」と讃するようになったのであった。

大日本武徳会へ

入門から2年足らずで講道館筆頭の実力を身に着けつつあった佐村は、

明治33（1900）年早々、僅か19歳にして、嘉納師範から「講道館柔道を関西に扶植するように」との命を受けた。大抜擢である。これは具体的には、京都に本部を置く大日本武徳会の柔道教授への就任が決定した磯貝一四段を補佐すべく、京都へ赴くべしという特命であった。大日本武徳会とは、明治28（1895）年4月、「武道を奨励し、武徳を涵養し、国民の士気を振作すること」¹⁹を目的として、全国・各種武道を網羅する形で設立された団体である。このたび、武徳会の正式な柔道教授に講道館の磯貝が任命されたことは、武徳会の柔術（柔道）部門の主流は講道館である、と決定されたようなものであったが、これに不満を抱く柔術諸流派は多く存在していた。当時の武徳会は、ご維新の生き残りの70歳80歳の武術家たちが、腰につけた瓢箪から酒を飲むような、未だ古

い時代の様相を色濃く持つものであった。柔術方面でも、起倒流・戸塚派楊心流・天神真楊流・不遷流などが相当羽振り²⁰を利かせている状態であったという。彼ら柔術諸流派の不満の理由には、一つ「講道館は寝技が弱い」というものがあつた。その不満を払拭するため、嘉納師範は、竹内三統流佐村正明の息子であり、実力充分の佐村を磯貝の下へ送つたのであつた。この当時は佐村は、次のように振り返っている。

ぼくらが段貫つた時は昔の四十、五十までの免許皆伝の人とやってもそう負けはせん。頸攻、誘込だと負けるが、だからぼくらは（明治）三十一、二年ごろからして立技も寝技もやっていた。でなければ武徳会で勤まらん。武徳会の教師だから、岡山の連中、千葉の戸塚あり、寝技、絞技、関節技あり、だからぼくら何でもやらざるを得

ない。そしてわれわれ技術を以て他流の連中を征服しようぢやないかというのでさかんにやった。磯貝君が（武徳会）本部にいる、ぼくが柔道部にいる、時々飯塚先輩が武者修行で回って来る。それから丁度永岡君が神戸の高商²¹におつた。だからこの四人が、おいやろうぢやないかと寝技でも立技でも、一生懸命練習したものですよ。そんなわけで他流の柔術の連中も、これは駄目だというので、最後には退陣せざるを得ないようになった。それは何故かという、連中は小さくやったから後輩を養成することが出来ない。講道館はどこまでも手を拡げてやるから、後輩の良い連中がどしどし出て来るの²²でね。

磯貝、佐村、永岡そして飯塚らは機会がある毎に集まっては寝技の研究に没頭した。そして、辛苦の末に

「講道館流寝技」²³とでもいうべきものを完成させ、関西における講道館の地位を確保したのであった。実際、柔術諸流派との実践においても佐村は無敗の記録を守り続けたという。そして、明けて明治34（1901）年1月13日の鏡開式において、京都での実績を認められて三段に昇段するのであった。

各地で柔道普及に尽す

その後も京都で磯貝の補佐に務めていたが、明治36（1903）年8月、佐村は一時上京することとなり、講道館で稽古をする機会があった。その時の稽古ぶりを、鹿児島県高等中学造士館²⁴の岩崎行親に見惚れられ、佐村は請われて急遽鹿児島へ柔道教師として赴任することになるのであった。余談ではあるが、この岩崎はこれに先立つこと6年、明治30（1897）年に飯塚国三郎に惚れこんで

彼を鹿児島へ連れて行った人物でもある。この時の佐村の報酬は、鹿児島で最高の月俸をとっていた県知事と同格という破格のものであったという。そして佐村は、最高の待遇の許に造士館や道場で柔道指導に当たる日々を送ることとなる。この鹿児島において佐村の大きな功績の一つは、後に「鬼の徳」と畏怖された徳三宝²⁵を見出したことであろう。徳三宝と柔道との出会いには、以下のような逸話がある。

彼（徳三宝）が鹿児島で中学一年の時、私（佐村）が第七高等学校（造士館）に赴任したときであった。彼は剣道のスジも大変良かった。彼の担当が藪重次郎といって陸軍大尉であった。（略）はじめは柔道より剣道の方がよかった。それを私が藪君に「柔道をやらせよう」というと剣道の先生は「それは怪しからん、不都合だ」と怒っ

講道館創立百二十周年記念

ビデオ 術から道へ

明治十五年（一八八二）、嘉納治五郎師範が講道館柔道を創始されてから百二十周年を迎える。柔道はオリンピック種目となり、人種、言語、政治、宗教などを超越して一八〇を越す國々に広く普及している。柔道はなぜこのように世界に広まったのだろうか。創立百二十年を機会に日本の文化として世界に誇る柔道がどのようにして生れ、どのように広まっていたのだろうか。嘉納師範の技と心を改めて振り返ります。

制作／財団法人 講道館

定価 三、六七五円（税込・送料別）

◎お申込・お問合わせ先

東京都文京区春日一―一六―三〇

講道館総務部

〒112-0003 電話 〇三―三八二―一七―一五五

たが、私も「自分の考えたことは是が非でもやる」というタチで一歩も譲らなかつた。ところが徳という悍馬も、なかなか人のいうことなど聴くヤツじゃない。それでこれを聴かせるようにしなくてはと考えて、桜島にある温泉に連れて行ったとき、ハダカにして海に入れた。馬（徳）のヤツ背が高いので平気になっているのをうしろから、押し倒してやったら泳ぎができないので「アブアブ」いってハナを出しながらブクブクしている。「どうだ、俺の言うことを聞くなら上げてやる」というと彼も「聞きます」というので傍にいた船頭を証拠人として引き上げてやった。それから柔道ばかりをやるようになった²⁶。

何とも酷い方法であるようにも見えるが、頑固者の悍馬同士、佐村は多少強引に出る必要があると思つたの

であろう。佐村は事前に、徳が全くのかなづちであることも調べてこの作戦に臨んだという。幸運にもこの後、徳は柔道の才能を見事に開花させ、講道館九段にまで昇るのであつた。

鹿児島で柔道の普及に年月を費やしていた佐村は、明治40（1907）年1月、27歳で四段に列せられた。そしてその年の5月、大日本武徳会が主催する第12回武徳祭大会において、佐村は心貫流柔術の豪傑・横田好三郎を寝技で立て続けに2本取り、この年の武徳祭最優秀の誉れに輝く²⁷。寝技で名を馳せていた横田に勝つたことで、地方にいてもやはり佐村強し、講道館に佐村あり、と改めて周囲に強烈な印象を与えることとなつた。

その後佐村は、広島県の広島高等師範学校²⁸の柔道教師、大日本武徳会の武術教員養成所教授²⁹、第八高等学



第9回全日本柔道選手権大会において古式の形を披露する。左から取・永岡、受・佐村。（昭和14年）

校教授³⁰、更に新設された福岡高等学校柔道教授などを歴任し、後進の指導に心血を注いでいった。この間、地方に居ながらにして、明治41（1908）年12月6日に五段、大正2（1913）年6月15日には六段、大正9（1920）年には七段と順調に昇段を重ねていった記録を見ても、嘉納師範の佐村に対する信頼が

頗る厚かったことが見て取れよう。大正10（1921）年に七段にして福岡に赴任した際も、嘉納師範に五段までの承認権を与えられていることから、その信頼を計ることができであろう。ただ、各地で指導を重ねていっても、個人的な弟子や派閥は一切作らず、公正無私、すべて講道館嘉納師範の大切な門人という立場で接した。こういったところに佐村の人柄が表れているように思われる。

生涯、常任指南役として

佐村は、嘉納師範から恃たのまれると同時に、最も師範を信望した人物であったといっても過言はない。師範の、精力最善活用・自他融和共栄という理念に賛同しただけに留まらず、その有言実行の生き方に強く感じ入り、まさに師範を「神に近い人」³²と評すほどであったという。昭和6

（1931）年1月に51歳で八段に昇段した佐村は、嘉納師範から中央へ戻ってくるように、との打診を受けた。佐村を講道館の常任指南役に据えたいとのことであった。師範は、「月給が少ななくて気の毒だが我慢してくれ」³³と言ったそうであるが、佐村は、月俸が今までの500円より100円になることに甘んじて、師範のためなら月給などいくらでもいい、と喜んでこれを受けた。ここに、明治33年から足掛け30年に及ぶ地方生活に終止符を打ち、講道館において後進の指導に一層努めることとなったのであった。

佐村はその全盛期をほぼ地方で過ごしたためか、歴史に残る大勝負というものはあまり多く伝わってはいない。ただ、「謙は衆善の基、傲は衆悪の魁」³⁴という謙虚な心構えを座右の銘に持つ佐村にとって、そういった武勇伝は全く興味の範疇外であっ

たに相違ない。試合についても、不断の修養・鍛錬が肝心であるから「試合しようとするまいと、勝とうと負けようと、そんなことは眼中にも心中にもない。要するにこの佐村の心境は『霽はれてよし曇りてもよし富士の山、元の姿は変わらざりけり』の歌そのまま」³⁵と述べているように、全日本柔道選士権での三船久蔵との模範乱取や、天覧試合での飯塚国三郎との乱取においても、勝敗は瑣末なことであり、そういったものから心身共に自在になるような柔道を求めていたようである。³⁷

昭和12（1937）年12月22日、佐村は57歳にして三船久蔵、田畑昇太郎³⁸らとともに九段に列せられることとなる。年明け早々に東京オリリンピック招致のため渡欧する嘉納師範の最後の置き土産であり、これが師範との今生の別れとなった。嘉納師範を正に師と慕っていた佐村の悲嘆



嘉納師範らを祀る不動尊の前にて、佐村十段夫妻。扉には講道館の徽章が施されている。

は、想像に難くない。しかし佐村はこの時、悲嘆に暮れると同時に、師範の教えと自分の信念を生涯貫き、講道館柔道の更なる発展を見守ろうという決意を新たにしようである。その後、第2代講道館長に南郷次郎が決定し、南郷が常任指南役を廃して常任相談役という新たな役職を作るに至っては、「俺は嘉納師範から指南役を命ぜられている。二段の館長が恩師の衣鉢を改正するとは何事だ。柔道のある限り指南役はやめない」と宣言し、そのまま常任指南役

を名乗って憚らなかつた。昭和23（1948）年5月4日、68歳で十段となっても、その師範を慕う気持ちに変わりはなかつた。

佐村自身は派閥を作らなかつたが、そんな権勢に阿らない、無私無欲・剛毅木訥な佐村を慕う者は多かつた。昭和34（1959）年、80歳になる佐村を祝う会が講道館大道場において開かれた。これは沢山の門人からの寸志によって実現したものであつた。佐村はここで戴いた祝賀金を自らのものとせず、その祝賀金をもつて、かねてより信仰している不動尊とともに嘉納師範を祀る祠を自宅の庭に建立する。そしてこれを「太上不動尊」と名付け、佐村は日夜柔道の発展を祈願する毎日を送るのであつた。

て、佐村は選手強化費として、柔道日本選手団に10万円を寄付する。この10万円は、先の「太上不動尊」への参拝客の賽銭が積もり積もつたものであつた。⁴⁰佐村の清貧ぶりを表す逸話であらう。時の講道館長・嘉納履正はこの心情に深く感じ入り、佐村が寄付金とともに認めた手紙を謄写し、日本選手全員に配つてその芳情を伝えたという。ただただ柔道一筋に、嘉納師範を信望しつづけた佐村は、同年11月6日、師範の代わりに東京オリンピックを見届けるかのように、老衰でこの世を去つた。享年84歳であつた。その多大な功績に対し、佐村は11月13日、講道館柔道史上4人目の講道館葬をもつて送られた。講道館入門以来60有年、心中一点の曇りなく、ただ偏に嘉納師範の遺訓を体し、講道館柔道精神に一身に傾倒した人生であつたといえるであらう。⁴¹

*引用文献は、現代漢字・仮名づかいに改めた。

《主要参考文献》

- 「技と思い出」と 佐村嘉一郎 『柔道』 第25巻第7号(昭和29年7月)
- 1 現在の熊本県熊本市
- 2 『知られざる日本柔術の世界』(山田實著 BABジャパン発行 平成8年)によると、佐村正明は身長170cm体重94kgの筋骨逞しい傑物であったという。
- 3 「希望訪問2」 『柔道』 第34巻第4号(昭和38年4月)
- 4 「十段物語(下)」 古賀残星著 『柔道』 第36巻第5号(昭和40年5月)
- 5 「柔道人國記」 石黒敬七著 『柔道』 第18巻第6号(昭和22年12月)
- 6 「回顧七十年」 座談会 『柔道』 第32巻第12号(昭和27年12月)
- 7 現在の攻玉社中学校・高等学校の前身
- 8 現在の明治大学の前身
- 9 現在の江戸川区小松川
- 10 両者とも後の十段
- 11 前掲註6 参照
- 12 「悍馬時代の徳三宝」 佐村嘉一郎著 『近代柔道』 第7号(昭和32年11月)
- 13 「講道館記事」 『國土』 第3号(明治31年12月5日)
- 14 前掲註6 参照
- 15 前掲註6 参照
- 16 後の前田光世。明治38年に柔道使節として海外へ渡り、ブラジル帰化後はコンデ・コマと名乗った。
- 17 「嘉納先生を偲ぶ」 『柔道』 第19巻第5号(昭和23年5月)
- 18 後の十段
- 19 「大日本武徳会設立趣旨」 『柔道百年』 老松信一著 時事通信社 昭和41年
- 20 『柔道範土磯貝一口述 わが七十年を語る』 長谷川泰一著 赤心同盟会東海支部 昭和15年
- 21 神戸高等商業学校。現在の神戸商業大学の前身の一つ。
- 22 前掲註6 参照
- 23 前掲註20 参照
- 24 後の第七高等学校造士館。現在の鹿児島大学の前身の一つ
- 25 後の九段。柔道殿堂の1人。
- 26 「悍馬時代を語る」 佐村嘉一郎著 「柔道新聞」 第61号
- 27 「武徳会本部記事」 『武徳誌』 第2編第6号(明治40年5月)
- 28 広島大学の前身の一つ。
- 29 後の武道専門学校。武専。
- 30 名古屋大学の前身の一つ。
- 31 「夫佐村嘉一郎十段を語る」 佐村佳圃著 『柔道』 第43巻第7号(昭和47年7月)
- 32 前掲註6 参照
- 33 「柔道の母 佐村佳圃夫人」 平間長市著 「柔道新聞」 第564号
- 34 「謙の心と柔道修行」 佐村嘉一郎著 『柔道』 第5巻第10号(昭和9年10月)
- 35 『大日本柔道史』 丸山三藏著 講道館発行(昭和14年)
- 36 後の十段
- 37 「柔道上達の秘訣を一口に云へば」 佐村嘉一郎著 『柔道』 第2巻第8号(大正5年8月)
- 38 後の十段
- 39 『世界柔道史』 丸山三造著 恒友社(昭和24年)
- 40 前掲註39
- 41 「佐村嘉一郎十段逝く」 『柔道』 第35巻第12号(昭和39年12月)
- 《写真典拠》
- 1 講道館柔道資料館 柔道殿堂展示写真より
- 2 講道館柔道資料館 収蔵写真より
- 3 『柔道』 第34巻第4号(昭和38年4月)